

## 熊本方言における形容詞の連母音の融合について

奥村 雄太

(言語文化学部 ロシア語専攻)

キーワード：熊本方言，新方言，形容詞，音融合

### 0. はじめに

本稿の目的は、熊本方言の形容詞の連母音の融合について、実際の使用状況を明らかにすることである。

本稿では、近年の熊本方言に関する記述のある先行研究をまとめ、様々な世代の熊本方言話者に対してインタビュー調査及び意識調査を行い、各世代における融合形の使用状況についてまとめた。結果、現在の熊本方言話者各世代・男女別の形容詞語尾の融合率、若年層における新しい融合形のパターンと定着率、及び形容詞語尾の使い分けパターンなどの一端が明らかになった。

なお、本稿における図表番号等は、特に断りのない限り筆者によるものである。

### 1. 背景知識

以下、熊本方言の形容詞について、九州方言学会(1969: 232)を要約する。

熊本方言における形容詞カ語尾は「県共通語」形としての品格と勢力とを持った社会性の高いものである。一方、イ語尾は家庭向き独自向きの情念性の強い、そしてやや古めかしい語形である。ナ語尾も、共通語的使用のものを除いて、伝統的なものはイ語尾に近い性格を持っている。したがって、フトカ/フテー、アブナカ/アブニャー、等の両形が並用されるのが普通である。

九州方言学会(1969: 267-268)には、共通語～イに終わる連母音にあたる、九州各地の従来の方言についての記述がある。熊本市における [ai]・[ui]・[oi] の各連母音の融合形の分布をまとめると、以下のようになる。

[ai] → [ja:]      [ui] → [i:]  
[oi] → [e:]

### 2. 先行研究

この節では、先行研究として内山(1996)を簡潔にまとめる。

内山(1996)は、熊本県での名詞・動詞・形容詞中の [ai]・[ui]・[oi] の3つの連母音の

融合化について、地域差、性差、世代差について考えながら、熊本県内の9か所<sup>1</sup>で調査してまとめたものである。調査は1993年7～8月と1995年7月に行われ、各調査地点の生え抜きの、60代男女・40代男女・高校生男女各2名ずつで、外住歴は5年までとしてある。ただし、熊本市の高校生については男女各4名ずつ調査が行われた。調査対象総数は108名である。

調査項目とされた単語は、名詞・動詞・形容詞あわせて177単語である。そのうち、形容詞は69単語で、以下の通りである。

- [ai] 高い 短い 赤い 温かい 近い 小さい 浅い 眠たい 痛い 固い  
冷たい めでたい くすぐったい もったいない 少ない みっともない  
仕方がない(ジョンナイ) うまい 狭い 甘い 早い 辛い 暗い  
荒い 恐い 弱い 長い 苦い 酸っぱい しょっぱい
- [ui] 低い ぬくい 四角い 見にくい 安い 薄い きつい ずるがしこい  
(コスイ) ごつい 暑い がめつい 寒い 煙い 眠い 悪い 軽い  
だるい 古い 丸い まずい 渋い 鈍い
- [oi] しつこい 面白い 遅い 細い 遠い 太い 重い 強い 黒い 白い  
広い のろい むごい すごい 飽きっぽい 怒りっぽい 青い

[ai]・[ui]・[oi]の連母音の融合率を、世代・性別ごとにまとめると、次の表1の通りになる。なお、本研究で取り上げる形容詞の項目は、太字にし、下線を引いてある。

表1: 連母音の世代・性別ごとの融合率(%<sup>2</sup>)

	名詞		動詞		形容詞	
	融合率	非融合率	融合率	非融合率	融合率	非融合率
60代 男	10.6	89.4	42.3	57.7	<b><u>18.7</u></b>	<b><u>81.3</u></b>
60代 女	0.6	99.4	39.2	60.8	<b><u>14.0</u></b>	<b><u>86.0</u></b>
40代 男	8.0	92.0	30.6	69.4	<b><u>25.8</u></b>	<b><u>74.2</u></b>
40代 女	5.5	94.5	6.2	93.8	<b><u>10.0</u></b>	<b><u>90.0</u></b>
高校 男	0.4	99.6	1.5	98.5	<b><u>39.9</u></b>	<b><u>60.1</u></b>
高校 女	0.0	100.0	0.6	99.4	<b><u>47.7</u></b>	<b><u>52.3</u></b>

(内山1996: 17を基に筆者作成)

[ai]・[ui]・[oi]連母音が、どのような形に融合したかもまとめている。以下の表2は、熊本市において、連母音ごとにどういった形に融合したか、また、カ語尾形や標準語形を含む全回答中の、それぞれの融合形の割合がどのようであったかをまとめたものである。

<sup>1</sup> 阿蘇郡阿蘇町(現阿蘇市)・玉名市・熊本市・八代市・本渡市(現天草市)・水俣市・球磨郡多良木町(以上93年調査)、玉名郡南関町・山鹿市(以上95年調査)。

<sup>2</sup> 本稿中の%表示は、先行研究を含め、全て小数第二位を四捨五入したものである。

なお、表中の点線は、伝統的融合形と新しく見られた融合形を区別しているものである。

表 2: 熊本市における [ai]・[ui]・[oi] 連母音の融合のバリエーションとその割合(%)

	[ai]		[ui]		[oi]	
男性	[ja:]	51.5	[i:]	53.8	[e:]	38.2
	[e:]	15.2	[ja:]	1.6	[ja:]	6.4
			[e:]	1.2	[i:]	4.1
女性	[ja:]	30.9	[i:]	62.5	[e:]	38.8
	[e:]	34.5	[e:]	3.3	[i:]	3.0
				[ja:]	11.6	

(内山 1996: 22 を基に筆者作成)

以上の調査を基に、内山は、[ai]・[ui]・[oi] 連母音の融合は、高校生においては動詞 (あるいは名詞) よりも形容詞で起こりやすいと述べている。形容詞では、地点によって差はあるものの、熊本県内では、強い勢力を持っていたカ語尾が衰退し、融合形の台頭が、特に熊本市近郊で著しくなっている。

さらに、内山(1996)では、[ai] 連母音の融合率が最も高かったことについて、調音位置を考慮しながら、以下のような考察によって結論付けられている。

[ai] は [a] が広母音であるのに対し、[i] は狭母音と、[ai] は対蹠的な音の連続であるが、[ui] はともに狭母音であり、[oi] も [ai] に比べると、2つの音の調音位置は近い。したがって [ai] 連母音が最も融合しやすいのは、こうした労力軽減の動きがあるのではないか。

(内山 1996: 22)

### 3. 先行研究のまとめと問題点

以上の先行研究から、伝統的方言における連母音の融合形、加えてどういった世代で新方言が広く浸透しているかなどが分かった。しかし、伝統的方言では表れなかった新しい融合形が、どのような単語で頻繁に出現しているかは明らかにされていなかった。

さらに、内山(1996)の調査は、現在から 20 年以上前のものであるため、新たに若年層を対象に調査しなおす必要性が感じられる。

## 4. 調査方法

### 4.1. 調査地域

今回は、内山(1996)の調査で、特に形容詞語尾の連母音の融合が強く現れた、熊本市及びその近郊に絞って調査する。本稿での調査地域は、熊本市、宇土市、宇城市の 3 市である。

#### 4.2. インフォーマントについて

高校生(15~18歳)、中年層(30~50代)、老年層(60~80代)からそれぞれ男女2名ずつの合計12名のインフォーマントを募集した。インフォーマントは、熊本市及びその近郊の生え抜き、または言語形成期を熊本市及びその近郊で育った者に限る。インフォーマントは、筆者の友人や親戚等から集った。

以下の表3は、各インフォーマントの性別・生年月日・年齢・言語形成期に住んでいた市町村をまとめたものである。

表3: インフォーマント情報

世代	ID <sup>3</sup>	性別	生年月日	年齢 <sup>4</sup>	言語形成期の居住地
老年層	OMa1	男	1935年3月	81	宇城市
	OMa2	男	1949年2月	67	熊本市
	OFe1	女	1934年10月	81	宇土市
	OFe2	女	1948年10月	67	宇土市
中年層	MMa1	男	1959年2月	57	熊本市
	MMa2	男	1962年2月	54	宇城市
	MFe1	女	1960年1月	56	宇城市
	MFe2	女	1968年9月	47	熊本市
高校生	HMa1	男	1998年10月	17	熊本市
	HMa2	男	1999年4月	17	熊本市
	HFe1	女	1998年7月	18	熊本市
	HFe2	女	1998年11月	17	熊本市

#### 4.3. インタビュー調査

インタビュー調査を行った目的は、熊本方言話者の各世代で、こういった形容詞の使われ方がされていて、それらに何らかの規則性があるのかを調べることである。

以下の調査を4.2節で示した12名のインフォーマントに対して実施した。調査は、筆者がインフォーマントの方と現地で直接対面して行った。

- ①調査対象の形容詞を標準語で示し、普段の会話でどのような形で使うか訊ねる、という翻訳式<sup>5</sup>のインタビュー調査を行う。なお、翻訳式調査は、インフォーマントの回答を標準語に引っ張ってしまう恐れがあるため、インフォーマントには、念入りに「普段の会話でどのように使うか」ということを強調した。
- ②調査結果の単語を、その融合形が伝統的な形か、または新しい形か分類する。

<sup>3</sup> IDの略号は、以下の意味を示す。

O: 老年層 M: 中年層 H: 高校生 Ma: 男性 Fe: 女性

<sup>4</sup> 年齢は、調査が行われた2016年9月10日時点のものである。

<sup>5</sup> 真田(編)(2001: 11-12)の調査を参考に行った。

インタビュー調査で用いた形容詞は、内山(1996)の調査で用いられた 69 単語の中から、筆者が [ai] [ui] [oi] を語尾に持つ単語からそれぞれ 8 単語ずつ、計 24 単語を無作為に抽出したものである。以下は、抽出した単語を語尾の音別に分類したものである。

- [ai] 短い 赤い 温かい くすぐったい もったいない みっともない 仕方がない しょっぱい  
 [ui] 四角い 見にくい 見やすい 低い きつい ずるがしこい だるい 丸い  
 [oi] 面白い 細い 太い 黒い 白い 青い 飽きっぽい 怒りっぽい

#### 4.4. 意識調査

4.3.節のインタビュー調査を踏まえた上で、意識調査も行った。意識調査を行った目的は、形容詞のカ語尾形・語尾の融合形・標準語形について、強調や感嘆の意味などによる使い分けをしているかを明らかにするためである。

12名のインフォーマントのうち、「調査項目の24単語は全て同じ形で使用する」と答えた方以外の8名に対し、以下のような質問をした。

・あなたは、日常会話で、形容詞のカ語尾形・語尾の融合形・標準語形を、意味を強調させたいときや、驚いたときなど、意味によって使い分けていますか。また、意味による使い分けでなくても、何かあればお答えください。

### 5. 調査結果

#### 5.1 インタビュー調査

この節では、4.3.節のインタビュー調査の結果をまとめる。

##### 5.1.1. 世代差

以下の表4は、連母音の融合率を世代別に算出し、表にまとめたものである。

表4: 連母音の世代・性別ごとの融合率(%)

	融合形	カ語尾形	標準語形	その他 <sup>6</sup>
老年 男	0	<u>97.9</u>	0	2.1
老年 女	0	<u>100</u>	0	0
中年 男	2.1	<u>97.9</u>	0	0
中年 女	0	<u>70.8</u>	29.2	0
高校 男	<u>27.1</u>	29.2	43.7	0
高校 女	<u>37.5</u>	20.8	37.5	4.2
全体	11.1	69.4	18.4	1.1

<sup>6</sup> 若者言葉や特別な方言形など、融合形・カ語尾形・標準語形との判別が難しかった特別な形。「面白い」→「うける」、「怒りっぽい」→「はーかく」など。

インフォーマント全体でみると、カ語尾形の割合が最も高く、融合形は最も低い数値を出している。このことから、熊本方言では、依然としてカ語尾形が「県共通語」としての地位を保っていると考えられる。

世代別にみると、老年世代と中年世代では、カ語尾形の割合が全体平均よりもはるかに高くなっている。一方、高校生になると、標準語形が最も使われている形であることが分かった。

連母音の融合形が使われている割合は、中年世代までではほとんど見られなかったが、高校生になると急激に増加した。しかし、高校生男子・女子共に、融合形の割合は、内山(1996)の調査(高校生男子 39.9%、高校生女子 47.7%)より 10%ほど数値を落としている。以上より、内山(1996)の調査後の 20 年間で、若年世代の標準語化が進んだのではないかと考えられる。

### 5.1.2. 調音位置による違い(〔ai〕・〔ui〕・〔oi〕 連母音別)

表 4 から得た結果を踏まえ、〔ai〕・〔ui〕・〔oi〕 連母音それぞれにおいて、どのような融合率を示したかを考察する。以下の表 5 は、各連母音の融合率を表にまとめたものである。

表 5: 〔ai〕・〔ui〕・〔oi〕 連母音の融合率(%)

	〔ai〕	〔ui〕	〔oi〕
融合率	<u>29.2</u>	22.9	10.4
非融合率	70.8	77.1	89.6
計	100.0	100.0	100.0

僅差ではあるが、内山(1996)の調査結果の通り、〔ai〕 連母音の融合率が最も高い数値を示した。内山(1996: 22)にも記述があったが、それぞれの連母音の調音位置を考えると、〔ai〕が 3 つの連母音の中では最も対蹠的な音の連続であるため、〔ai〕 連母音においては、労力軽減の働きが最も強く影響しているのではないかと考えられる。

調音位置の観点からすると、〔ui〕 連母音よりも〔oi〕 連母音の方が調音位置が遠いので、〔oi〕 連母音では〔ui〕 連母音よりも労力軽減の働きが影響しやすく、融合しやすいと考えられる。それにも拘らず、本調査では、〔oi〕 連母音の融合率は 3 つの形の中で最も低かった。しかし、本調査においては、〔oi〕 連母音形において現れた融合の形は、全て、〔oi〕 → [ja:] という、高校生世代による新しい形であった。〔oi〕 連母音においては、中年層以上の世代は全て、カ語尾形もしくは標準語形で回答している。つまり、〔oi〕 連母音形においては、中年層以上の世代ではカ語尾もしくは標準語形が使われており、高校生世代については、〔oi〕 → [ja:] の新方言形が、この世代における「共通語」として広く浸透していると考えられる。

### 5.1.3. 性差

この節では、性差を考慮した考察を行う。5.1.1節で掲載した表4を再確認されたい。

中年層男性は、標準語形で答えた割合が0%であり、調査項目の24単語では標準語形は使われないということになるが、中年層女性が標準語形で答えた割合は3割に近い。この結果には、「標準的規範の方向へ向けての変化は女性の方に比較的高い」(真田・渋谷・陣内・杉戸 1992: 20)という、社会言語学的な傾向が顕著に現れていると言えるだろう。

以下の表6は、[ai]・[ui]・[oi] 連母音が融合形で現れた場合に、どのような形に融合したかを、それぞれ男女別にまとめたものである。男性、女性の各項目の最上段には、本来存在する伝統的な形の融合形を下線で示し、それ以下の項目には新しい形の融合形を並べている。

表6: [ui]・[ai]・[oi] 連母音の融合の男女別のバリエーションとその割合(%)

	[ai]		
	融合後の音	回答者数	割合
男性	<u>[ja:]</u>	5	100
女性	<u>[ja:]</u>	7	77.8
	[o:]	1	11.1
	[e:]	1	11.1
	[ui]		
	融合後の音	回答者数	割合
男性	<u>[i:]</u>	6	100.0
女性	<u>[i:]</u>	5	100.0
	[oi]		
	融合後の音	回答者数	割合
男性	<u>[e:]</u>	0	0.0
	[ja:]	3	100.0
女性	<u>[e:]</u>	0	0.0
	[ja:]	4	100.0

内山(1996)の調査結果と比べ、連母音の融合のバリエーションは極端に乏しくなっている。これは、内山(1996)の調査から20年間で、様々な新しい融合形が興亡した末に、[oi] 連母音において、「[oi] → [ja:]」という形が定着し、現在の高校生世代の「共通語」として浸透した結果だと思われる。「[oi] → [ja:]」という変化の形については、「[ai] → [ja:]」という、[ai] 連母音形における伝統的な融合形からの類推によって生じた形が、広く浸透したのではないかと考える。

一方、男女間の差異については、[ai] 連母音において女性の方が若干バリエーションが豊富に見えるが、現れた新しい融合形は、それぞれ一人ずつしか回答していないため、インフォーマントによる個人差とみてよいと考える。

### 5.2. 意識調査

以下、4.4節の意識調査の結果の要点をまとめる。

①中年層に関しては、形容詞の使い分けは、「親しい会話相手」と「ある程度丁寧さが要求される会話相手」とで使い分けることがほとんどである。ただし、「親しい会話相手」のなかでも、「同い年・年上」と「年下」でも使い分けがなされる。

②高校生に関しても、形容詞の使い分けは、「親しい会話相手」と「ある程度丁寧さが要求される会話相手」とで使い分けることがほとんどである。ただし、高校生の場合、「同い年・

年上」にも「年下」にも語尾の融合形を使うことがほとんどであり、中年層のような使い分けは特に行っていない。

③複数の高校生の回答者から、「形容詞語尾に関しては、全て標準語形を使う友人がいる」という回答が得られた。同じ高校生の間でも、カ語尾形や語尾の融合形などを使う者もいれば、全て標準語形で使用する者もいる。

## 6. まとめ

以上の調査から、新しい形の融合形を使用しているのは、ほとんど高校生世代であるという結論が導き出される。それ以上の世代においては、カ語尾形が依然として優勢である。また、インタビュー調査の結果から、新方言として高校生世代に使われ始めているのは、[oi] 連母音 → [ja:] がほとんどであるということも判明した。内山(1996)の調査でみられた、[oi] 連母音 → [ja:] 以外の使われ方はほとんど消滅しており、[oi] 連母音 → [ja:] の使われ方のみが現在でも若い世代の熊本方言話者の間で主流であることが明らかになった。

方言の使い分けに関しては、5.2節でもまとめた通り、中年層に関しては、同じ日常会話でも「年上・同年代相手」と「年下相手」でも使い分けがなされるが、新方言を利用する高校生の世代では、そのような使い分けを行わないということも判明した。

その一方で、高校生世代のなかには、カ語尾形や連母音の融合形のような方言形は一切使わず、いかなる場合でも標準語形を使用している話者もいる可能性があることも、判明した。高校生より若い世代では、標準語形のみを使用する話者ももっと多く存在するかもしれない。

### 参考文献・参考 URL

秋山正次・吉岡泰夫 (1991) 『暮らしに生きる熊本の方言』熊本: 熊本日日新聞社. / 内山智美 (1996) 「熊本県下における連母音の融合状況」『日本文学研究』31 巻 A15-A24, 梅光学院大学. / 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) (1995) 『言語学大辞典』第 6 巻 術語編. 東京: 三省堂. / 九州方言学会 (1969) 『九州方言の基礎的研究』東京: 風間書房. / 真田信治 (編) (2001) 『方言文法調査項目リスト -天草篇-』大阪学院大学情報学部文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究 (A) 『環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究』. / 真田信治・渋谷勝己・陣内正敬・杉戸清樹 (1992) 『社会言語学』東京: 桜楓社. / 陣内正敬 (1996) 『地域語の生態シリーズ』九州篇. 東京: おうふう. / テクノコ白地図イラスト「九州地方」[http://technocco.jp/n\\_map/kyushuarea.html](http://technocco.jp/n_map/kyushuarea.html) (最終閲覧日 2017/1/3) / テクノコ白地図イラスト「43 熊本県」[http://technocco.jp/n\\_map/kyushuarea.html](http://technocco.jp/n_map/kyushuarea.html) (最終閲覧日 2017/1/3) / 都道府県地図 Mapion 「熊本県地図」<http://www.mapion.co.jp/map/admi43.html> (最終閲覧日 2017/1/3)